

《第466回（2019年9月12日）子どもの本の読書会記録》 参加者：8人 文書参加：1人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『ホメーロスのオデュッセイア物語 上・下』 ホメーロス/原作、バーバラ・レオニ・ピカード/作、高杉 一郎/訳 岩波書店

『オデュッセイア』は、今から三千年ほど前に、ギリシアのホメーロスによって書かれた叙事詩です。これを、現代の少年少女たちが全体を通して読めるようにと再話したものが、今月の課題図書である『ホメーロスのオデュッセイア物語』です。

物語は、10年にわたるトロイア戦争にギリシア軍が勝利をおさめた後、それぞれの故郷に帰還するところから始まります。イタケー島の王・オデュッセウスも軍船をつらね、故郷の島をめざして地中海に乗り出します。しかし辿り着く島々では、一つ目の巨人に襲われたり、海の支配者ポセイドンの怒りに触れ船が難破するなど、数々の苦難が待ち受けていました。親切なパイアース人に助けられ、イタケー島に帰還するまでの期間は、10年間におよびます。

一方イタケー島では、トロイア戦争の開戦から20年の間、妻ペーネロペイアがオデュッセウスの帰りを待ち続けていました。そんなペーネロペイアを我が嫁にしようと、館に押し寄せたのは100人の求婚者。オデュッセウスの財産を食いつぶしながら、ずうずうしくも館に居座ります。命からがら帰還に成功したオデュッセウスは、たくましく成長した息子と、信頼のおける数人の仲間と共に、不屈きな求婚者たちから館を奪還する策略を企てるのです。

神と人間が共存する世界での手に汗握る冒険、登場人物の心の機微や愛憎、求婚者たちとの最後の決闘など、ドキドキハラハラする物語は、今も変わらず人々の心を引きつけることでしょう。古典だからと敬遠せずに、ぜひ一度読んでもらいたい本でした。

次に、読書会に参加したみなさんの感想を紹介します。

●読むのが大変、と思ったけどすらすらと読めた。長いストーリーだけど、上手に読者を引っ張って行ってくれる。最後に故郷に帰り、正義は勝つという、すっきりする気持ちのいい終わり方。古代ギリシアの世界観を味わうことができた。挿絵も素敵。

●行く島々で仲間が死ぬ上に、なかなか故郷にたどり着けず、もどかしい気持ち

で読んだ。神話と事実が入り混じる物語。去年の読書会の課題図書『レモンの図書室』の主人公が、10歳でこの本を読んでいたことに驚いた。きっと、『オデュッセイア』が西洋文化に根付いているからなのだろう。

●まえがきに、「どこの少年少女でもオデュッセウスの行った冒険を少なくともひとつくらいは必ず知っている」という一文があった。日本でいうと、古事記？全部通して読んだことがある人は少ないけど、ヤマタノオロチの話は知っているような感覚かな。物語として面白く、先の展開にわくわくした。

●古典だし、上下があるし、とっつきにくいと感じていたが、読み始めるとすいすい読めた。古典に触れる機会があることはありがたい。ただただ楽しく読めた。

●『オデュッセイア』が、ヨーロッパ文化における教養の基礎になっているのではないか。この物語を楽しめる今の子どもは100人中2人くらいかもしれないが、ギリシア文化や神話に興味を持つきっかけになるのではないかと思う。叙事詩として聞けたら楽しいんじゃないか。

●仲間が魔法使いに豚に変えられてしまうシーンでは、「千と千尋の神隠し」を思い出した。物語の本質と自分の身近にあるものが重なり合ったときに、わくわくした。読みやすいし、楽しかった。物語としてよくできている。

●小学生の時に読んだギリシア神話を思い出しながら読んだ。ギリシャ神話とは違い、オデュッセウスの英雄譚がメインの物語。当時の人には親しまれていた王様だったんだろうなということが分かる。今の文化から考えると野蛮と思われることでも、当時からすると美学だったこともあるんだなと思った。

●苦戦したけど、読めてよかった。口承で伝えられてきた古代ギリシャの叙事詩を、何千年も後に生きる我々も読めるということが素晴らしい。一つ目の巨人に人がバリバリと食べられるシーン、どこかで見た気が……進撃の巨人だ。

次回 10月10日(木) 10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『科学的とはどういうことか いたずら博士の科学教室』 板倉 聖宣/著 仮説社